

鈴木有郷牧師 説教

## 9/20/09「説得し続ける神」 エレミア書 3:12、21-22

エリ・ヴァイゼルという作家を御存知でしょうか。ナチスのユダヤ人収容所に強制収容された時の原体験を描いた「夜」という題の壮絶な手記でノーベル賞を授与された人です。

収容所の看守は何でも強制できたそうです。大切な結婚指輪を指から抜き取って看守に差し出すことを強制できました。密告を強制することもできました。友達や親への裏切を強制することもできました。収容所ではすべてが看守の意のままになっていました。

「しかし」とこのユダヤ人は書いています。「いかなる傲慢で残酷な看守も、私たちに愛を強制することはできなかった。」

そう、愛は強制できないのです。神にも愛を強制することはできないのです。

聖書が示す神は、人間に愛されることを求めて止まない神です。その神の一途な思いをエレミアという預言者は娘に背かれて悲痛な思いでその後ろ姿を見送る親の心境に似ていると言っています。

エレミアは、人に愛されることを求めながら、愛されず深い痛みを覚えている神の心境をもう一つの例に託して表現しています。

それは裏切られた恋人のイメージです。神の心境は恋いこがれている女性が自分を捨てて他の男の後を追っていくのを見る恋人のそれのようだというのです。「背信の女イスラエルよ、我に立ち返れと主は言われる。」

しかし、それでも神は人間に愛を強制しようとはされないのです。いや、神にも愛だけは強制できないのです。

エレミアは、この子供に拒絶された親のような悲しみと、相手に裏切られて傷ついた恋人のような痛みを覚える神は、しかし忍耐強く、神に立ち返るようと人間の説得にあたっておられる、と語ります。

「立ち返れ、わたしに立ち返れ。わたしはお前に怒りの顔を向けない。わたしは慈しみ深く、とこしえに怒り続ける者ではない、と主は言われる。」

神は私たちに愛されようと一生懸命なのです。一途なのです。それは以下のパウロの言葉にも明らかです。

「キリストは神の御姿であられたのにご自分を無にして、仕える者の姿を取り、人間と同じようになられたのです。」神は言葉を通してではなく、人間の姿を取って私たちの只中に入ってこられた、と言うのです。

このパウロの言葉を説明するために、キルケゴールという18世紀のヨーロッパの神学者は、次のような寓話を残しています。これは前にもお話したことがあるので、覚えておられる方がいらっしゃるかもしれません。新しいコンテクストの中であらためて触れてみたいと思います。

ある王様が身分の低い娘に恋をします。彼はどのようにしたら彼女に求愛の念を伝えることができるか一生懸命考えます。宮殿に連れてくれば、彼女はそれまで目にした事もなかった豪華な家具に目がくらんで、混乱してしまうでしょう。家来をつれて森の中の彼女の家を訪れれば、彼女は萎縮して王が自分を愛しているなどとは決して思わないでしょう。

そこで王様は一つの決断をします。以下がこの寓話の結びです。「王は身分の低い女から結婚の承諾を受けるために、王位を捨てて木こりとなった。」つまり、王様は娘と結婚するために王の座から下りて、彼女と対等な身分となったと言うのです。

このキルケゴールの寓話の意味は明らかです。身分の低い娘を愛した王様が、愛において対等になるために王位を捨てたように、神は私達が、恐れず、惑わず、自由に愛することができるようにナザレのイエスとなって私たちの只中に来られたと言うのです。

愛は強制することができません。神にもできません。愛には説得あるのみです。神はその説得を私たちの所へ下降されることによってなされたのです。これは人間が想像もできない神の私達に向けられた衝撃的な愛の告白です。

クリスチャンとは、この神の愛に心を打ち砕かれ、喜びで全身がうち震える人のことです。このことを胸に刻み付けて、来る一週間をクリスチャンとして、人間らしく、慎み深く、しかし大胆に、生き生きと生きようではありませんか。